

平成三十一年三月  
宗学院論集第九十一号抜刷

〈共同研究〉 称名寺聖教 『法事讚光明抄』 について (一)

——概要と巻一翻刻——

赤松信映・西村慶哉・佐竹真城

〈共同研究〉 称名寺聖教『法事讚光明抄』について（一）

—— 概要と巻一翻刻 ——

赤松信映  
西村慶哉  
佐竹真城

概要（佐竹）

はじめに

現在、神奈川県立金沢文庫で管理される称名寺聖教のなかに、『法事讚光明抄』（目録番号：九四―四―一―四）と仮に名づけられた一書がある。四巻に分冊された本書は、古目録類にはその名を見ることはできないものの、内題と撰号より、法然門下の覚明房長西（一一八四―一二六六）による善導（六一三―六八一）撰『安楽転経行道願生淨土法事讚』（以下『法事讚』と略称）の註釈書であることが分かる。古来、長西の著作のほとんどは早くに散逸したと考えられていたため、昭和の調査で顕出されて以降、研究者の間では長西教義を窺う上で重要な典籍であると認識されていた。ところが、癖のある筆跡、所謂くずし字で記されているためか、今日まで一部を除いて翻刻が紹介

されることもなく、殆ど研究に用いられることはなかったのである。

筆者が一瞥したところ、『法事讚光明抄』は、種々の観点より重要な典籍であることは明らかである。すなわち、成立年こそ未だ詳らかでないが、文永五（一二六八）年の書写奥書を持つことから、現存最古級の『法事讚』註釈書として貴重である。また、撰者が長西であることから、長西教義、特に『法事讚』巻下に全文引用される『阿弥陀経』の理解を知ることができるほか、今日は散逸して伝わらない浄土教典籍を数多く引用している点、さらには長西と同時代に活躍した鎮西義第三祖の然阿良忠（一一九九—一二八七）への影響を看取できる点など、長西教義研究のみならず、中世浄土教研究に大きく資することができる典籍であると考えられる。

小論は、『法事讚光明抄』の概要を記し、併せて巻一の翻刻を掲載して、長西教義研究の益々の進展と、中世浄土教研究の一助となることを願うものである。なお、巻二以降についても稿を改めて翻刻を紹介する予定である。

一 書誌情報

まず、本書の書誌情報を整理しておきたい。便宜上、以下に表で纏めておく。<sup>(1)</sup>

	装幀	紙数	本文		書写者	備考
卷一	綴葉	一七丁	漢文(仮名交)	〈表紙〉中央「法事讚」上／一、四卷内第 右下「湛奢」左下「永源(花押)」 〈内題〉「浄土疑芥」「別申小経部／善導法事 讚」 〈撰号〉「欣浄沙門長西録」「答以口受書之／或 加私解」	永源	『法事讚』卷上釈
卷二	綴葉	二五丁	漢文(仮名交)	〈表紙〉中央「法事讚」下／三、四卷内第二 右下「湛奢」左下「永源(花押)」	永源	『法事讚』卷下釈 「仏説阿弥陀経」(八 三〇頁)～「無量諸天 大衆俱」(前同)
卷三	綴葉	二八丁	漢文(仮名交)	〈奥書〉「文永五年曆九月四日子時書了」 〈表紙〉中央「法事讚四卷内第四」右下「湛 奢」左下「永源(花押)」 〈奥書〉「文永五年」「戊辰」九月十日亥時書了 ／於洛陽一条万里小路阿弥陀寺如形書 写了／後見之人々南无アミタ仏一反穴 賢々々／執筆永源(花押)	永源	『法事讚』卷下釈 「捨彼莊嚴」(八三一 頁)～「貪瞋即是身三 業」(八四四頁)
卷四	綴葉	二二丁	漢文(仮名交)	〈表紙〉中央「法事讚四卷内第四」右下「湛 奢」左下「永源(花押)」 〈奥書〉「文永五年」「戊辰」九月十日亥時書了 ／於洛陽一条万里小路阿弥陀寺如形書 写了／後見之人々南无アミタ仏一反穴 賢々々／執筆永源(花押)	永源	『法事讚』卷下釈 「如我今者」(八四四 頁)～「帝王人王」(八 六五頁)

なお、これらの情報から、本書の書名について一考を要するように思う。すなわち、「法事讚光明抄」という書名が、表紙・内題・奥書等の何れにも見られないのである。現状の『法事讚光明抄』という書名は、同じく金沢文庫管理の称名寺聖教であり、長西撰述書として知られる『観経疏光明抄』（目録番号・九四一六―一七）および『往生礼讚光明抄』（目録番号・九四一三）に準じたものと推察する。この二書の書名は、左表「金沢文庫所蔵長西著作書誌情報一覧表」に示したように、表紙に「光明抄」と記されることに起因するものと考えられる。そして、『観経疏光明抄』の内題には「浄土疑芥」とある点から、岸章二氏が「この内題の浄土疑芥といふのは、十八巻の『観経疏光明抄』は勿論『法事讚光明抄』、『礼讚光明抄』、『論註光明抄』等を総称するものである<sup>(3)</sup>」と指摘するように、長西には「浄土疑芥<sup>(4)</sup>」という一連の著作群があり、単独では「光明抄」という呼称が用いられていたと窺うことができる。しかし、金沢文庫には同様に長西の著作として『群疑論疑芥』（目録番号・九四一五―一三）の書名で伝えられるものがある点に鑑みれば、本書も一応は『法事讚疑芥』と名付けるのが穏当であろうと考える。そのため、筆者が過去に執筆した論攷における引用や、これより以下の小論における呼称は、『法事讚疑芥』とすることを断っておきたい。

金沢文庫所蔵長西著作書誌情報一覧表

聖教名	表紙・内題・撰号・奥書
『往生礼讚光明抄』卷二・三（合冊）	<p>〈表紙〉中央「往生礼讚〔光/明〕抄三卷内〔第二自日没/第三訖後序〕」右下「湛睿」左下「永源（花押）」</p> <p>〈奥書〉「文永五年八月十六日/礼讚三卷内第二」</p>

<p>『観経疏光明抄』卷二断簡</p>	<p>〈奥書〉「文永六年九月十一日酉時書了於花洛一条万里小路アミタ寺／写也後見人々念仏十反穴賢々々／執筆永源春秋廿九」</p>
<p>同卷三</p>	<p>〈表紙〉中央「□□疏〔光／明〕抄〔玄七／第三〕十八卷内第三〔自序題門／至釈名門〕」右下「湛睿」左下「永源（花押）」          〈奥書〉「文永六年九月十日巳時書了 於一条万里小路アミタ寺写也」</p>
<p>同卷五断簡</p>	<p>〈奥書〉「文永五年六月十八日書了 花洛北小路書□」</p>
<p>同卷八</p>	<p>〈表紙〉中央「□経疏〔光／明〕抄〔序三／第一〕十八卷内第八〔自証信序／至化序〕」左上「観経序分義抄第一」右下「湛睿」左下「永源（花押）」          〈内題〉「浄土疑芥〔別申観経部／善導疏第二〕」          〈撰号〉「欣浄沙門 長西録〔答以口受一書之／或以私解加之〕」          〈奥書〉「文永六年九月廿一日戌時書了 於洛陽一条万里小路／阿弥陀院写之／執筆永源〔春亀／廿九〕」</p>
<p>同卷十</p>	<p>〈表紙〉中央「観経疏〔光／明〕抄〔序三／第三〕十八卷内第十〔自厭苦縁／至終〕」左上「観経序分義抄第三」右下「湛睿」左下「永源（花押）」          〈奥書〉「文永五年〔戊／辰〕六月廿四日 執筆永源（花押）／為洛陽武者小路万利小路観音堂書之畢」</p>
<p>同卷十五・十六（合冊）</p>	<p>〈表紙〉中央「□経疏〔光／明〕抄〔散四／一二〕十八卷内〔第十五〕〔自始／至就人立信〕／第十六〔自就行立信／至上品上生〕」左上「観経散善義抄第一第二」右下「湛睿」左下「永源（花押）」          〈内題〉「浄土疑芥〔別申観経部／善導疏第四〕」          〈撰号〉「欣浄沙門長西録〔答以口入書之／或以私解〕」</p>

	<p>〈奥書〉「文永六年九月廿二日巳時許書了 於京洛一条万里小路アミタ寺写□／執筆 永源〔春秋廿九〕」</p>
同巻十七・十八（合冊）	<p>〈表紙〉中央「観経疏〔光／明〕抄〔散四／三四〕十八巻内〔第七〕〔自上品中生／至中品下生〕／第八〔自下品上生至終也〕」 右下「湛睿」 左下「永源（花押）」</p> <p>〈奥書〉「文永六年九月廿四日□□於□□一条万里／小路□ミタ院写也／執筆永□（花押）」</p>
『群疑論疑芥』巻六	<p>〈表紙〉右上「群疑論第六疑芥答」 右下「称名寺」 左下「伝覚静／西観」</p> <p>〈内題〉「浄土疑芥〔通申説経部／群疑論第六〕」</p>
同巻七	<p>〈表紙〉中央「群疑論疑芥第七」 左下「伝覚静」 右下「金沢称名寺／西観」</p> <p>〈内題〉「浄土疑芥〔通申説経部／群疑論第七〕」</p>
同巻八	<p>〈表紙〉中央「群疑論疑芥第八」 右下「称名寺」 左下「伝覚静／西□」</p>
『浄土論注要文抄』（仮題）	<p>〈奥書〉「文永六年八月廿八日子時□□一条万里小路也」</p>

二 『法事讚疑芥』に関する先行研究

次に、本書へ言及が見られる先行研究を確認しておきたい。

・塚本善隆博士「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀観の鎌倉古鈔本」（『浄土学』巻五／六・五七五―五七六頁、一九

三三年 ※傍線は筆者による加筆）

（抄）法事讚（光明抄）四巻内第一、第二、第四、長西撰、永源手沢、湛睿所持本

称名寺聖教『法事讚光明抄』について（一）

第一冊の表紙に

法事讀へ上／＼四卷内第一

その巻初には

浄土疑芥へ別申小経部／善導法事讀へ欣浄沙門長西録へ答以口受書／之或加私解へ

とあり。第四の終には

文永五年へ戊辰へ九月十日亥時書了

於洛陽一条万利小路阿弥陀寺如形書写、後見之人々南無阿弥陀佛一反穴賢穴賢、執筆永源花押

の奥書を見る。以て此書が(9)觀經疏光明抄、(20)往生礼讚光明抄と共に長西の著述を永源が京都にて書写せるものなるを知る。

・岸章二氏「金沢文庫所蔵『觀經疏光明抄』玄七第五(?) 同序三第一の本文及びその解説と光明抄研究の一問題」(『宗学研究』巻一一・一五四頁、一九三五年 ※傍線は筆者による加筆)

『觀經疏光明抄』の諸問題を論じるなかで、処々に本書の書名が挙げられ、内容も概ね把握している様子が窺える。たとえば次の如くである。

又こゝに今師といふは善導を指してゐる如く、『觀經疏光明抄』、『法事讀』及び『礼讚』の『光明抄』にあつては、善導呼ぶに今師若くは和尚の略称を用ひ、元祖法然上人を呼ぶに上人なる敬称を用ひてゐる。

しかしながら、実際に文言を引用し、内容へ詳細に言及している箇所は見られない。

・安井広度博士『法然門下の教学』(三六頁、一九三八年「一九六八年複刊」 ※傍線は筆者による加筆)

(7)『浄土疑芥』



『群疑論疑芥』第七巻の内題に「浄土疑芥通申諸經部群疑論第七」と記し、『觀經疏序分義光明抄』の初に「浄土疑芥別申小經部群疑論第七」と記す所を見ると、彼には「浄土疑芥」と題する大部の浄土教に関する著述があつたやうに察せられる。全部で何巻あつたか解らないが、『觀經疏光明抄』十八巻のうち、『玄義分』（七巻）は序題門釈名門等を存し、『序分義』（三巻）は第二巻を缺き、『定善義』（四巻）は全部を缺き、『散善義』（四巻）は大概之を伝へ、その他に、『法事讚』、『礼讚』、『論註』等の鈔を残してゐる。

・石田充之博士『日本浄土教の研究』（二九九—三〇〇頁、一九五二年）※傍線および山括弧内は筆者による加筆と註

(5)法事讚光明抄（一、二、四の三巻三冊現存）（金沢文庫蔵）……一連の「浄土疑芥へ※」なしは原文ママ  
と内題する議義録と推測されるもので、門弟の私解等が加えられているが、大体その著と推定される。

・石田充之博士『法然上人門下の浄土教学の研究』巻下

（七八頁、一九七九年）※傍線および山括弧内は筆者による加筆と註

(5)法事讚光明抄（一、二、四の三巻三冊現存）永源手沢本湛睿所持へ※「金沢文庫蔵」の脚註あり……一連の「浄土疑芥」と内題する長西の議義録と推定されるもので、門弟の私解等が加えられているのであつて、大體長西師の思想内容を伝える著述であると思惟して宜しいであろう。

但し、書中門弟の私解が多く加えられておつて時に長西の説か門弟の説か判別に苦しむ点がある故、その辺の判別に注意すべきであろう。

・『浄土宗大辞典』（巻三・二八四頁、一九八〇年）※傍線は筆者による加筆

ほうじさんのまつしよ【法事讚の末書】……九品寺流では長西撰・永源写の「光明抄」四巻（第三巻欠）があ

称名寺聖教『法事讚光明抄』について（二）

る。本書は覚明房長西が『法事讚』を講じた稿本を、一二六八年(文永五)永源が京都一条万里小路阿弥陀院において書写したもの。

・吉田淳雄氏「長西の著作について」(『仏教論叢』巻四四・九七頁、二〇〇〇年) ※傍線は筆者による加筆)

法事讚光明抄は、従来は第一・二・四巻のみ現存とされてきたが、実は四巻全てが現存する。ただし巻二の巻末と巻三の巻初は欠落している。巻一は上巻の積、残る巻二・四は下巻の積である。

外題は

法事讚 へ上／＼ 四巻内第一

法事讚 へ下／＼ 四巻内第二

などとなっており、また巻一には

浄土疑芥 へ別申小経部 善導法事讚 欣浄沙門長西録 へ答以口受書之 或加私解 へ

との内題を有する。

・『新纂浄土宗大辞典』(一三二八頁、二〇一六年) 執筆・吉田淳雄氏 ※傍線は筆者による加筆)

法事讚光明抄 四巻。長西撰。金沢文庫保管。善導『法事讚』の註釈書。巻二の巻末と巻三の巻初は欠落するものの四巻全てが現存する。巻一は上巻の、巻二以降は下巻の積である。昭和初期に金沢文庫より発見された典籍の一つで、諸行本願義の立場からの『法事讚』ひいては『阿弥陀経』理解を窺うことのできる貴重な資料である。

如上、本書の存在および貴重性・重要性には言及しながらも、外面的な情報の紹介の域を出るものではなく、内容にまで踏み込んだ論攷は確認できない。

三 『法事讚疑芥』の内容

既に述べたように、『法事讚疑芥』は『法事讚』の註釈書である。具体的には『法事讚』の本文を「●●等事」と細分し、多くの経論釈を引用しながら撰者の理解が示されている。また、『法事讚』巻下には『阿弥陀経』が全文引用されることから、長西における『阿弥陀経』理解が窺える点でも注目に値する。さらには、『阿弥陀経』註釈にあたって多くの文献を引用するが、そのなかには今日では散逸して伝存しない典籍(5)が含まれていることも、本書の価値を大きく高めるものと考ええる。以下、本書における注目すべき説示を数例紹介したい。

例①

疑云、不論念仏諸行ミタ光明撰往生人歟。答、撰取必可限念仏也。

(金沢文庫蔵文永五年書写本、卷一・三丁左)(6)

阿弥陀仏の光明は、念仏と諸行とを分け隔てなく往生人を撰するのかという問いに対し、撰取は必ず念仏に限ると答えている。

例②

又雑善者何等歟。答、念仏外諸行也。此即正雜二行中雜行也。(金沢文庫蔵文永五年書写本、卷三・二四丁左)

雑善とは念仏以外の諸行であり、正雜二行でいえば雜行であると定義している。

例③

又雑善何難生歟。答、疎遠故也。疎遠故力弱也。故般舟讚云、万行俱廻皆得往、念仏一行最為尊。廻生雑善恐力弱、无レ過ニ一日七日念文。(金沢文庫蔵文永五年書写本、卷三・二四丁左)

念仏以外の諸行である雑善(雜行)は疎遠であり力が弱いから往生し難いことを、『般舟讚』を文証として述べている。

例④

以<sub>テ</sub>真<sub>ニ</sub>觀<sub>ル</sub>三<sub>ニ</sub>緣<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>積<sub>ラ</sub>准<sub>レ</sub>彼<sub>ニ</sub>案<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>、今人能念仏々還念<sub>ト</sub>者、散心也。此得<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>業<sub>ヲ</sub>。如<sub>シ</sub>真<sub>ニ</sub>身<sub>ノ</sub>觀<sub>ル</sub>口常称念<sub>等</sub>。此即念<sub>チ</sub>仏<sub>ノ</sub>三<sub>ニ</sub>味<sub>ノ</sub>為<sub>ル</sub>宗<sub>ノ</sub>意<sub>也</sub>。專<sub>ニ</sub>心<sub>ノ</sub>想<sub>ス</sub>仏<sub>々</sub>知<sub>ル</sub>人<sub>者</sub>、此得<sub>ニ</sub>意<sub>ノ</sub>業<sub>ヲ</sub>一<sub>ニ</sub>辺<sub>ヲ</sub>。如<sub>シ</sub>真<sub>ニ</sub>身<sub>ノ</sub>觀<sub>ル</sub>衆<sub>生</sub>憶<sub>念</sub>仏<sub>等</sub>。此即觀<sub>ル</sub>仏<sub>ノ</sub>三<sub>ニ</sub>味<sub>ノ</sub>為<sub>ル</sub>宗<sub>ノ</sub>意<sub>也</sub>。意<sub>云</sub>、本願乃至十念々仏中<sub>ニ</sub>巨<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>業<sub>ヲ</sub>有<sub>ル</sub>定<sub>散</sub>念<sub>ス</sub>仏<sub>ノ</sub>積<sub>ル</sub>頭<sub>也</sub>。余<sub>ニ</sub>処<sub>ニ</sub>称<sub>ス</sub>我<sub>ノ</sub>名<sub>号</sub>等<sub>者</sub>、此<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>業<sub>ノ</sub>中<sub>ニ</sub>散<sub>称</sub>本願<sub>ノ</sub>正<sub>意</sub>。往<sub>生</sub>正<sub>業</sub>偏<sub>在</sub>之<sub>ニ</sub>。故<sub>ニ</sub>積<sub>ル</sub>肝<sub>要</sub>也。

(金沢文庫藏文永五年書写本、卷一・一〇丁左)

本願文の「乃至十念」は三業にわたるもので定散両義を有した念仏であるが、そのなかでも散心の称名念仏が本願の正意・往生の正業であることを明かしている。

例⑤

尋<sub>テ</sub>云<sub>ハク</sub>執<sub>持</sub>名<sub>号</sub>者、觀<sub>レ</sub>称<sub>中</sub>何<sub>ノ</sub>歟。答<sub>フ</sub>今<sub>ニ</sub>積<sub>ル</sub>雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>云<sub>ニ</sub>称<sub>名</sub>ニ<sub>ニ</sub>玄<sub>義</sub>別<sub>時</sub>門<sub>ニ</sub>積<sub>ミ</sub>一<sub>日</sub>七<sub>日</sub>称<sub>ニ</sub>仏<sub>ノ</sub>之<sub>名</sub>、礼<sub>讚</sub>後<sub>序</sub>積<sub>ス</sub>ニ<sub>ニ</sub>心<sub>シ</sub>称<sub>レ</sub>仏<sub>不</sub>乱<sub>レ</sub>。又<sub>ニ</sub>積<sub>ル</sub>十<sub>声</sub>又<sub>ニ</sub>積<sub>ル</sub>若<sub>シ</sub>称<sub>レ</sub>仏<sub>往</sub>生<sub>者</sub>云<sub>々</sub>。諸<sub>師</sub>皆<sub>以</sub>如<sub>レ</sub>此<sub>也</sub>。難<sub>ク</sub>云<sub>ハク</sub>、今<sub>ニ</sub>聞<sub>ク</sub>説<sub>ク</sub>ア<sub>ミ</sub>タ<sub>仏</sub>者、指<sub>テ</sub>上<sub>ニ</sub>光<sub>明</sub>寿<sub>命</sub>无<sub>量</sub>故<sub>名</sub>ニ<sub>ア</sub>ミ<sub>タ</sub>仏<sub>ノ</sub>之<sub>説</sub>歟。若<sub>爾</sub>者<sub>執</sub>持<sub>名</sub>号<sub>者</sub>、聞<sub>ク</sub>觀<sub>念</sub>之<sub>境</sub>謂<sub>ク</sub>可<sub>レ</sub>觀<sub>ル</sub>ニ<sub>ニ</sub>光<sub>明</sub>寿<sub>命</sub>等<sub>ノ</sub>故<sub>何</sub>云<sub>ニ</sub>称<sub>名</sub>ニ<sub>歟</sub>。又<sub>付</sub>經<sub>ノ</sub>之<sub>文</sub>言<sub>ニ</sub>執<sub>持</sub>二<sub>字</sub>不<sub>レ</sub>必<sub>ニ</sub>聞<sub>ク</sub>称<sub>名</sub>ニ<sub>如何</sub>。答<sub>フ</sub>難<sub>ク</sub>勢<sub>実</sub>□爾<sub>也</sub>。但<sub>論</sub>藏<sub>性</sub>相<sub>云</sub>、ハ<sub>リ</sub>名<sub>句</sub>文<sub>身</sub>依<sub>レ</sub>声<sub>仮</sub>立<sub>レ</sub>。故<sub>名</sub>号<sub>必</sub>可<sub>レ</sub>口<sub>唱</sub>之<sub>也</sub>。雖<sub>レ</sub>爾<sub>堅</sub>著<sub>共</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>一<sub>偏</sub>。經<sub>論</sub>文<sub>言</sub>多<sub>含</sub>付<sub>ニ</sub>執<sub>持</sub>名<sub>号</sub>ニ<sub>可</sub>レ<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>業<sub>ノ</sub>之<sub>行</sub>也。是<sub>以</sub>諸<sub>師</sub>解<sub>釈</sub>辺<sub>々</sub>也。

(金沢文庫藏文永五年書写本、卷三・二二丁左)

『阿弥陀經』の「執持名号」について、表面上は称名の義を取るものの、觀念的に解釈していく義を完全否定せず、經論の文言は多岐にわたり、「執持名号」においても三業の行があるのだから、一つの見解に執着すべきでは